

A. 研究目的

薬物乱用性頭痛の特徴と治療について、レビューを行った。

B. 研究方法

文献検索を行い、文献数報のシステマティックレビューを行った。

（倫理面への配慮）

該当なし。

C. 研究結果と考察

【薬物乱用性頭痛の特徴と治療】

下記の検索式を用いた結果、各々DB毎に数件の文献が検索された。

Headache

& {medication overuse} OR {transformed migraine} OR {chronic daily headache} 171件
& {analgesics} 113件

検索 DB : PubMed (04/10/14, Reference Manager より)

このうち、エビデンスレベルの高い下記の3報についてレビューを行った。

- (1) Bigal ME, Rapoport AM, Sheftell FD, et al. Transformed migraine and medication overuse in a tertiary headache centre-clinical characteristics and treatment outcomes Cephalalgia 2004; 24: 483-90
- (2) Colas R, Munoz P, Temprano R, et al. Chronic daily headache with analgesic overuse: epidemiology and impact on quality of life Neurology 2004; 62: 1338-42
- (3) Zed PJ, Loewen PS and Robinson G Medication-induced headache: Overview and systematic review of therapeutic approaches Ann Pharmacother 1999; 33: 61-72

レビューの結果、下記のとおり考察された。

1ヶ月に15日以上起こる片頭痛様頭痛や1ヶ月に15日以上起こる片頭痛様頭痛と緊張型頭痛様頭痛の混合した状況の主要原因は、片頭痛の対症療法薬または鎮痛薬もしくはその両方の乱用である。

その予防と治療の原則は、「原因薬物の中止」、「薬物中止後に起こる頭痛への対応」、「予防薬

の投与」の三つであるが、いずれも確立された治療法はない。

日ごろからエルゴタミン製剤、鎮痛薬、トリプタン薬などの使用頻度(月10日以上)とならないよう管理し、かつ患者教育することが必要である。

【エルゴタミン乱用性頭痛の特徴と治療】

下記の検索式を用いた結果、各々数件の文献が検索された。

Headache

& {medication overuse} OR {transformed migraine} OR {chronic daily headache} 171件
& {ergotamine} OR {dihydroergotamine} OR {ergot} 22件

検索 DB : PubMed (04/10/14, Reference Manager より)

このうち、エビデンスレベルの高い下記の3報についてレビューを行った。

- (1) Bigal ME, Rapoport AM, Sheftell FD, et al. Transformed migraine and medication overuse in a tertiary headache centre-clinical characteristics and treatment outcomes Cephalalgia 2004; 24: 483-90
- (2) Evans S, Gralow I, Brauer B, et al. Sumatriptan and ergotamine overuse and drug induced headache: a clinicoepidemiology study Clin Neuro 1999; 22: 201-6
- (3) Zed PJ, Loewen PS and Robinson G Medication-induced headache: Overview and systematic review of therapeutic approaches Ann Pharmacother 1999; 33: 61-72

レビューの結果、下記のとおり考察された。

薬物乱用頭痛の発現率は、エルゴタミンの方がトリプタンよりも起こりやすかったという報告がある。また、エルゴタミンの生物学的利用率は非常に変動しやすいので最低用量を定義することは難しい。

その予防と治療の原則は、「原因薬物の中止」、「薬物中止後に起こる頭痛への対応」、「予防薬の投与」の三つであるが、いずれも確立された治療法はない。

日ごろからエルゴタミン製剤、鎮痛薬、トリプタン薬などの使用頻度(月10日以上)とならないよう管理し、かつ患者教育することが必要である。

【トリプタン乱用性頭痛の特徴と治療】

下記の検索式を用いた結果、各々DB毎に数件の文献が検索された。

Headache

& {medication overuse} OR {transformed migraine} OR {chronic daily headache} 171件
& {triptan} 12件

検索DB： PubMed (04/10/14, Reference Managerより)

このうち、エビデンスレベルの高い下記の4報についてレビューを行った。

- (1) Bigal ME, Rapoport AM, Sheftell FD, et al. Transformed migraine and medication overuse in a tertiary headache centre-clinical characteristics and treatment outcomes Cephalalgia 2004; 24: 483-90
- (2) Katsarava Z, Fitsche G, Muessig M, et al. Clinical features of withdrawal headache following overuse of triptans and other headache drug Neurology 2001;57:1694-8
- (3) Evans S, Gralow I, Brauer B, et al. Sumatriptan and ergotamine overuse and drug induced headache: a clinicoepidemiology study Clin Neuro 1999;22:201-6
- (4) Zed PJ, Loewen PS and Robinson G Medication-induced headache: Overview and systematic review of therapeutic approaches Ann Pharmacother 1999; 33:61-72

レビューの結果、下記のとおり考察された。

トリプタンの乱用は、片頭痛の頻度を増加させ、慢性片頭痛の頻度も増加させる可能性がある。エルゴタミンの乱用よりも、トリプタン乱用の方が早期に起こる報告がある。

その予防と治療の原則は、「原因薬物の中止」、「薬物中止後に起こる頭痛への対応」、「予防薬

の投与」の三つであるが、いずれも確立された治療法はない。

日ごろからエルゴタミン製剤、鎮痛薬、トリプタン薬などの使用頻度(月10日以上)とならないよう管理し、かつ患者教育することが必要である。

D. 結論

薬剤長期乱用に伴う頭痛の特徴は、下記のとおりである。

1) 鎮痛薬乱用の特徴

1ヶ月に15日以上起こる片頭痛様頭痛や1ヶ月に15日以上起こる片頭痛様頭痛と緊張型頭痛様頭痛の混合した状況の主要原因は、片頭痛の対症療法薬または鎮痛薬もしくはその両方の乱用である。

2) 鎮痛薬乱用頭痛の予防と治療

その予防と治療の原則は次の三つである。

- ① 原因薬物の中止
- ② 薬物中止後に起こる頭痛への対応
- ③ 予防薬の投与

原因物質は漸減する方法と、すぐに中止する方法の2種類があり、すぐに中止する方法の方が良好な結果をえるという報告が多い。薬物中止後におこる頭痛への対応方法としては、トリプタン系薬、ナプロキセン、プロクラルペラジンの報告がある。予防薬としては、抗うつ薬、抗てんかん薬、ステロイド、トリプタン系薬、消炎鎮痛薬とさまざまな薬物療法が報告されているが、いずれも症例数少なくオープン試験がほとんどであるため、確立された治療法はない。

薬物乱用頭痛は、原因薬物の服用中により1~6ヶ月間は70%ほどの症例で改善が得られるとの報告が多いが、長期予後では約40%が再び薬物乱用を起こしてしまう。日ごろからエルゴタミン製剤、鎮痛薬、トリプタン薬などの使用頻度(月10日以上)とならないよう管理し、かつ患者教育することが必要である。

G. 研究発表

該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

該当なし

頭痛の医療経済に関する研究

研究協力者 清水 俊彦 東京女子医科大学脳神経センター脳神経外科講師
荒川 一郎 日本大学薬学部薬事管理学研究室

研究要旨 文献検索より得られた文献 2 報についてレビューを行い、頭痛の医療経済的影響を検討した。

1990 年代に欧米においてトリプタン薬が、群発頭痛や片頭痛の治療に導入された。しかし、高価な薬剤であったため欧米各国においてトリプタン薬が医療費支出に見合うだけの臨床効果を持っているかどうか、いわゆる費用対効果の評価が頻繁に行われた。その結果、カナダの CCOHTA(Canadian Coordinating Office for Health Technology Assessment)という政府系機関によるトリプタン薬の経済評価に代表されるように、「経口トリプタン薬は経口エルゴタミン薬に比べて、医療財政に対しては許容範囲内の増分費用で高い患者の QOL が改善される。また、社会全体に対しては経口トリプタン薬により便益が還元される。」というトリプタン薬は費用対効果に優れているという結論が得られた。なお、本邦においては分担研究者が過去に行ったスマトリプタン錠における費用対効果の検討論文が公表されているのみである。

以上、国内外の研究結果から、頭痛は社会的にも損失が大きく、トリプタン製剤による治療は費用対効果に優れていると考えられた。

A. 研究目的

頭痛とその治療の医療経済的影響について検討した。

{Migraine}, OR {Cluster Headache}
AND {Cost-Effectiveness} OR {Economic Evaluation} OR {Pharmacoeconomics} OR {QOL}

B. 研究方法

文献検索を行い、文献数報のシステマティックレビューを行った。

(倫理面への配慮)

該当なし。

検索 DB : 医学中央雑誌 PubMed (04/12/4)

このうち、下記の 2 報についてレビューを行った。

C. 研究結果と考察

下記の検索式を用いた結果、各々DB 毎に数件の文献が検索された。

医学中央雑誌

{片頭痛} OR {群発頭痛}

AND {費用対効果} OR {経済評価} OR {薬剤経済} OR {医療経済} 2 件

PubMed

(1) Evans KW, Boan AJ, Evans JL and Shuaib A Economic evaluation of oral sumatriptan compared with oral caffeine/ergotamine for migraine Pharmacoeconomics 1997; 12: 565-577

(2) 清水俊彦、岩田誠、西村周三 片頭痛治療におけるスマトリプタン錠の医療経済学的検討 診断と治療 2001;38:787-799

カナダの政府系機関が行った評価では、社会的

分担研究報告書

立場から、カフェイン/エルゴタミンの代わりにスマトリプタンを使用することで、発作1回抑える毎に 25 カナダドルの増分費用対効果比が必要であり、1 QALY を得るために 7507 カナダドルが必要であり、年間1人当たり 42 カナダドルが社会に還元される結果となった。保険支払い者立場からは、発作1回抑える毎に 98 カナダドルの増分費用対効果比が必要であり、1 QALY を得るために 29366 カナダドルが必要であるという結果となった、健康保険プランに採用するための医療技術に関する意思決定のため推奨度としては、中程度であった。感度分析の結果、組み込んだ変数が相対的に大きく変化しても、分析結果の頑健性が保たれていた。

また、著者らが行った評価では、一回の発作を避けるために、僅か約 600 円の余計なお金を支払うだけですむ。また、1年間発作に悩まされず健康に暮らすためには、約 200 万円

強の余計なお金を支払いことになる。しかし、余計なお金はカナダの保険償還の基準に照らし合わせると、中程度に推奨される基準に当てはまることから、スマトリプタン錠による片頭痛治療は費用対効果に優れた治療法であると考えられた。

D. 結論

国内外の研究結果から、頭痛は社会的にも損失が大きく、トリプタン製剤による治療は費用対効果に優れていると考えられた。

G. 研究発表

該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

該当なし

頭痛と妊娠に関する研究

研究協力者 清水 俊彦 東京女子医科大学脳神経センター脳神経外科講師
荒川 一郎 日本大学薬学部薬事管理学研究室

研究要旨 頭痛と妊娠に関する文献検索を行った結果により得られた文献について、レビューをおこなった。その結果、次の通り考察された。

国際頭痛学会の診断基準では、前兆のない片頭痛の一部として、「A1.1.1 前兆のない純粋月経時片頭痛」、「A1.1.2 前兆のない月経関連片頭痛」が定義されている。しかし、同診断基準では妊娠、授乳中の頭痛に関する記述が少ない。

また、日本神経学会の頭痛治療ガイドラインでは片頭痛急性期治療としてトリプタン系薬の使用が推奨されているが、妊娠、授乳中の安全性について言及されていない。

そこで、今回妊娠と授乳に焦点を当ててその期間の頭痛の特徴を考察するとともに、トリプタン系薬の安全性について文献的レビューを行った。

妊娠、授乳中の片頭痛の状態については、妊娠期間中80%もの女性が片頭痛発作を回避していた。しかし、出産第一週で半分以上の患者で片頭痛の再発が起こった。主な発作改善が不十分な理由としては、妊娠中の生理学的経時変化が上げられ、母乳は出産後の片頭痛再発を抑えることが示唆されたと報告されている。

また、妊娠、授乳中のトリプタン系薬の安全性については、1報の大規模な試験と1報のシステマティックレビューから妊娠初期におけるトリプタンの使用が、催奇形の危険性を大幅に増加させるものではなかったことを報告しており、これらのデータが妊娠初期におけるトリプタン系薬の安全性を保障するものであると報告しているが、一方で胎児に特殊な先天異常の危険性がある程度増す可能性は否定できないと結論付けている報告もある。

さらに、今回、FDAがOTCとして汎用されている鎮痛薬(アセトアミノフェン、NSAIDなど)の使用に関するキャンペーンを実施した。その中でFDAは、アセトアミノフェンの過剰使用が肝臓へのダメージを引き起こすとか、NSAIDは胃粘膜障害を起こすことを指摘しており、さらに妊娠中の鎮痛薬の乱用は、流産を助長する可能性があるとしてFDAコミッショナーであるMark B. McClellan医師のコメントとして発表していた。

A. 研究目的

頭痛と妊娠について、文献的検討を検討した。

ックレビューを行った。

(倫理面への配慮)

該当なし。

B. 研究方法

文献検索を行い、文献数報のシステマティ

C. 研究結果と考察

【妊娠、授乳中の頭痛】

分担研究報告書

下記の検索式を用いた結果、各々DB毎に数件の文献が検索された。

Headache

& {pregnancy} 1357 件

& {lactation} 68 件

検索 DB： PubMed (04/10/14, Reference Manager より)

レビューの結果、下記のとおり考察された。

- (1) Fox AW, Chambers CD, Andreson PO, et al. Evidence-based assessment of pregnancy outcomes after sumatriptan exposure Headache 2002; 42:8-15
- (2) Kallen B, Lygner PE, Delivery outcomes in women who used drugs for migraine during pregnancy with special reference to sumatriptan Headache 2001; 41: 351-6
- (3) Sances G, Granella F, Nappi RE, et al. Course of migraine during pregnancy and postpartum: a prospective study Cephalgia 2003; 23:197-205

レビューの結果、下記のとおり考察された。

妊娠、授乳中の片頭痛の状態については、妊娠期間中80%もの女性が片頭痛発作を回避していた。しかし、出産第一週で半分以上の患者で片頭痛の再発が起こった。主な発作改善が不十分な理由としては、妊娠中の生理学的経時変化が上げられ、母乳は出産後の片頭痛再発を抑えることが示唆されたと報告されている。

また、妊娠、授乳中のトリプタン系薬の安全性については、1報の大規模な試験と1報のシステマティックレビューから妊娠初期におけるトリプタンの使用が、催奇形の危険性を大幅に増加させるものではなかったことを報告しており、これらのデータが妊娠初期におけるトリプタン系薬の安全性を保障するものであると報告しているが、一方で胎児に特殊な先天異常の危険性がある程度増す可能性は否定できないと結論付けている報告もある。

D. 結論

妊娠期間中は、多くの患者が片頭痛発作を回避していたが、出産第一週で半数以上の患者で片頭痛の再発が起こったという報告がある。さらに、母乳は出産後片頭痛の再発を抑えるという報告もある。

妊娠初期におけるトリプタンの安全性は確立していないものの、システマティックレビューの結果から早産や出生時低体重が認められた報告もなかった。

さらに、妊娠期間中、緊張型頭痛に対する鎮痛薬の乱用は、流産を助長する可能性があるとしてFDAは警告している。

G. 研究発表

該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

該当なし

本邦における頭痛に対するボツリヌス療法についての文献的検討

研究協力者 有村 公良 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科神経病学・助教授

研究要旨 本邦における頭痛および頭部神経痛に対するボツリヌス（BTX）療法の有効性に関する報告をまとめ、現状と今後の課題について報告した。本邦では主に片頭痛を対象とした臨床試験が行われている。その結果、BTXは片頭痛に対してはいずれも有効であった。また三叉神経痛などの頭部神経痛にも有効であった。今後CRTに基づいた大規模臨床試験の実施が望まれる。

A. 研究目的

慢性頭痛に対するボツリヌス（BTX）療法は近年欧米を中心に行われており、現在でも大規模のCRT studyが数多く進行中である。BTXはその薬理作用から緊張型に有効であることが予想されるが、実際は片頭痛の方に有効性が高い、BTXの効果にはBTXの投与量、投与部位の設定（一定の部位、あるいは疼痛部位）が影響されることが指摘されており、今後本邦でも注意深く投与部位、投与量を考慮した、より大規模な多施設臨床試験が必要である。以上のことから、現状での本邦での頭痛に対するBTX療法の有効性に関する研究について検討した。

B. 研究方法

本邦においては2施設でBTXの頭痛に対する有用性についての検討がなされ報告されている。その結果について検討を行った。また我々の施設でも倫理委員会を経て慢性連日性頭痛に対するBTX療法が進行中あり、その途中経過についても一部検討した。

C. 研究結果

1. 寺本の報告⁽¹⁾：open label study

寺本は2003年に27例の頭痛患者（慢性片頭痛20例、慢性群発頭痛7例）で、同意書を得て個人輸入したBotox 100を用いて、左右の前頭筋8単位、皺鼻筋4単位、鼻根筋2単位、側頭筋8単位、後頭筋4単位、頭板状筋4単位の総量30単位、あるいはさらに側

頭筋を追加し総量34単位を筋注し、その効果を検討した。評価は1か月ごとの頭痛の頻度の減少、頭痛の程度の減少、服用薬物量の減少、服用頓服薬の効果増大について問診で行っている。その結果、慢性片頭痛患者では、著明改善例3例を含む14例（70%）で頭痛の程度の改善を認めた。頻度の改善を6例（33.3%）で認めており、全体として17例（85%）でBTXは有効であった。慢性群発性頭痛患者では、著明改善1例を含む5例（71.4%）で改善を認め、頻度の改善も4例（57.1%）で認めており、全体として6例（85.7%）で有効であった。効果の出現時期は2週間以内が慢性片頭痛群で8例、慢性群発性頭痛群で3例に見られ、2週間以降1ヶ月以内がそれぞれ6例と2例、1ヶ月以降がそれぞれ3例と1例であった。効果の持続時間は慢性片頭痛群12例、慢性群発頭痛群6例と全体の66.7%が3ヶ月以上の効果を認めている。

2. 寺本の報告⁽²⁾：open label study

寺本はその後、慢性片頭痛患者の症例数を40例に増加し、著効14例（35%）、有効20例（50%）、総計34例（85%）でBTX療法が有効であったと報告している。

3. 鈴木らの報告⁽³⁾：open label study

鈴木らは国際頭痛学会の診断基準に基づき片頭痛と診断され、1ヶ月に5回以上の発作がある20例（男1例、女19例）でBotox 100

分担研究報告書

を鼻根筋、皺鼻筋、前頭筋、側頭筋、後頭筋に計 50 単位の筋注を行い、1 ヶ月ごとに MIDAS、頭痛日記を用いた頭痛の頻度、程度、副作用について検討した。その結果、MIDAS の改善、片頭痛の頻度および程度の改善、頓挫薬服用回数の減少を認めている。また重大な副作用は認められていない。

4. 東らの報告⁽⁴⁾：症例報告

東らは眼瞼痙攣に右三叉神経痛を伴う症例で、眼瞼痙攣に対する眼輪筋への BTX の投与と同時に、皺鼻筋への BTX に投与を行い VAS、HIT-6 での改善を報告した。

5. 鹿児島大学病院での臨床試験の状況

我々は鹿児島大学病院の倫理委員会で承認を受け、通常の治療では改善が困難な慢性連日性頭痛の症例で Botox と生理食塩水による cross over 試験を行っている。ただ症例が今のところ 3 例と少なく、解析は行っていないが、BTX の有効性が認められている。

D. 考察

本邦での頭痛に対する BTX 療法の臨床試験は、ここに報告したように最近始まったばかりであり、そのデータは非常に乏しい。片頭痛に対する BTX 療法の有効性は、海外での CRT study の結果を含めほぼ確立していると言える。本邦での open label study の結果もそれを追認したものと言える。一方慢性群発性頭痛に対する BTX の有効性が明らかになったことは重要である。片頭痛の治療はトリプタン製剤の出現から、有効な薬剤が数多く存在し、高価である BTX の使用は医療

経済的にも制限される。今後難治性の慢性片頭痛あるいは慢性群発性頭痛、さらには慢性緊張型頭痛などが対象となると考えられる。このような点を考慮した本邦で CRT に基づく大規模臨床試験の実施が必要である。一方、今回三叉神経痛に対する効果が認められたように、治療困難な頭部神経痛への応用なども考慮して行く必要がある

文献

- (1) 寺本純一：日本頭痛学会雑誌 31(2): 182-4, 2004
- (2) 寺本純一：脳と神経 56:663-669, 2004
- (3) 鈴木康輔ら：日本頭痛学会雑誌 31(3): 58
- (4) 東 桂子、有村公良ら：日本頭痛学会雑誌 31(3):78

E. 結論

頭痛および頭部神経痛に対する BTX 療法は有用である。

F. 健康危険情報

とくになし。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
東 桂子、有村公良ら：日本頭痛学会雑誌 31(3):78

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
荒木信夫	群発頭痛一病態生理	坂井文彦	最新医学別冊 新しい診断と治療のABC 21 頭痛	最新医学社	大阪	2004	166-172
荒木信夫	日本神経学会治療ガイドライン：慢性頭痛治療ガイドライン(2002)	山口徹・	今日の治療指針 2005年版	医学書院	東京	2005	1577-1582
池田 憲	脳ドックの役割	坂井文彦	最新医学別冊 新しい診断と治療のABC 21 頭痛	最新医学社	大阪	2004	57-64
久保慶高	二次性頭痛の鑑別診断	鈴木孝弘	カレントセラピー	ライフメディアコム	東京	2004	61-64
久保慶高, 小川 彰 他	ネットワークリングが不可能な内頸動脈海綿静脈洞部の巨大動脈瘤に対する外科治療	永田 泉	新世紀のバイパス術	真興社	東京	2004	122-125
鈴木則宏	セロトニンと頭痛	M. Satoh (ed)	Serotonin update. New Frontiers of Neurotransmitter Research. 7.	Excerpta Medica., /Elsevier Japan	Tokyo	2004	1-20
鈴木則宏	頭痛	山口徹、北原光夫 (編)	2004今日の治療指針—私はこう治療している—	医学書院	東京	2004	652-654
鈴木則宏	片頭痛の知識を深める	間中信也 (編)	トリプタンの使い方〜片頭痛治療薬のさじ加減〜	フジメディアカル出版	東京	2004	41
根来 清, 多田由紀子	頭痛外来	坂井文彦	最新医学別冊 新しい診断と治療のABC 21 頭痛	最新医学社	東京	2004	26-32
橋本洋一郎, 井 重博, 内野 誠	頭痛医療システム：プライマリケアと病診連携	坂井文彦	最新医学別冊 新しい診断と治療のABC 21 頭痛	最新医学社	東京	2004	40-50

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
濱田潤一	セロトニンの役割	坂井文彦	新しい診断と治療のA B C21 神経2 頭痛	最新医学社	大阪	2004	119-125
平田幸一	トリプタン系薬剤の投与禁忌、不適切使用 例、他薬との相互作用	間中信也, 喜多村孝 幸	トリプタンの使い方	フジメデイカル出 版	大阪	2004	130-133
平田幸一	緊張型頭痛	坂井文彦	頭痛・神経2・	最新医学社	大阪	2004	143-152
平田幸一	高齢者への投与	間中信也, 喜多村孝 幸	トリプタンの使い方	フジメデイカル出 版	大阪	2004	137
平田幸一	小児における投与は可能か？	間中信也, 喜多村孝 幸	トリプタンの使い方	フジメデイカル出 版	大阪	2004	138-139
平田幸一	妊娠中・授乳中の投与は可能か？	間中信也, 喜多村孝 幸	トリプタンの使い方	フジメデイカル出 版	大阪	2004	134-136
平田幸一	慢性連日性頭痛	柳沢信夫, 篠原幸 人, 岩田誠, 清水輝 夫, 寺本明	Annual Review 神経	中外医学社	東京	2004	68-74

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Iizuka T, Sakai F, Yamakawa K, Suzuki K, Suzuki N,	Vasogenic leakage and the mechanism of migraine with prolonged aura in Sturge-Weber syndrome	Cephalalgia	24	767-770	2004
Ikeda K, Kashihara H,	Brain check-up-based study of migraine in Japan.	Headache Care	2	75-80	2005
Kusumi M, Araki H, Ijiri T, Kowa H, Adachi Y, Takeshima T, Sakai F, Nakashima K,	Serotonin 2C receptor gene Cys23Ser polymorphism: a candidate genetic risk factor of migraine with aura in Japanese population.	Acta Neurol Scand	109(6)	407-409	2004
Kubo Y, Ogawa A et al.	Anxiety before and after surgical repair in patients with asymptomatic unruptured intracranial aneurysm.	Surg Neurol.	62(1)	28-31	2004
Kubo Y, Ogawa A et al.	Treatment of vertebral artery aneurysms with posterior inferior cerebellar artery-posterior inferior cerebellar artery anastomosis combined with parent artery occlusion.	Surg Neurol.	61(2)	185-189	2004
Kowa H, Fusayasu E, Ijiri T, Ishizaki K, Yasui K, Nakaso K, Kusumi M, Takeshima T, Nakashima K	Association of the insertion/deletion polymorphism of the angiotensin I-converting enzyme gene in patients of migraine with aura.	Neurosci Lett	374(2)	129-131	2005
Sakuma K, Takeshima T, Ishizaki K, and Nakashima K.	Somatosensory evoked high-frequency oscillations in migraine patients.	Clin Neurophysiol	115	1857-1862	2004
Shimizu T, Iwata M	Migraine patients prefer zolmitriptan orally disintegrating tablets (DOT) to eletriptan oral tablets.	Headache Care	1	299-301	2004
Takeshima T, Ishizaki K, Fukuhara Y, Ijiri T, Kusumi M, Wakutani Y, Mori M, Kawashima M, Kowa H, Adachi Y, Urakami K, Nakashima	Population-based door-to-door survey of migraine in Japan: the Daisen study.	Headache	44(1)	8-19	2004
Takeshima T, Nakashima K	Genetics of migraine headache.	JMAJ (Japan Medical Association Journal)	47	140-145	2004

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Hirata K	Differential diagnosis of chronic headache	JMJA	47(3)	118-123	2004
Yasushi Takase, Misa Nakano, Chikao Tatsumi and Tatsuo Matsuyama	Clinical features, effectiveness of drug-based treatment, and prognosis of new daily-persistent headache (NDPH): thirty cases in Japan	Cephalalgia	24	955-959	2004
荒木信夫	群発頭痛および三叉神経・自律神経性頭痛の診断と治療	Brain Medical	17(1)	7-12	2005
荒木信夫	頭痛の原因 - 発症のメカニズム -	治療	86(4)	1449-1454	2004
荒木治子, 竹島多賀夫, 福原葉子, 井尻珠美, 古和久典, 中島健二	鳥取大学神経内科頭痛外来におけるトリプタンの検討	日本頭痛学会誌	31	98-100	2004
井尻珠美, 竹島多賀夫, 荒木治子, 居安恵美, 楠見公義, 古和久典, 孫明子, 粟木悦子, 池田憲, 中島健二	慢性頭痛患者におけるHelicobacter pylori感染率およびCagA抗体陽性率の検討	日本頭痛学会誌	31	57-59	2004
岩田誠	ヘルスケア相談室 頭痛のタイプを見分けて“ズキズキ”を解消	さわやか	328	6-7	2004
岩田誠	慢性頭痛と治療薬NSAIDsの位置付け	Medical Tribune	37	27	2004
池田 憲	脳ドックの役割.	カレントセラピー	22	76-79	2004
小田口浩, 若杉安希乃, 花輪壽彦	頭痛診療における漢方の役割	カレントセラピー	22(10)	81-84	2004
河野浩之, 橋本洋一郎, 三隅洋平, 米村公伸, 内野 誠	限局性に硬膜が造影された特発性低髄液圧症候群	神経内科	61	206-207	2004
近藤裕美, 西村芳子, 田中俊久, 岩田誠, 佐中孜	大腸癌を伴う慢性肥厚性硬膜炎を呈した血液透析患者の1例	透析会誌	38	57-60	2005

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
古和久典, 房安恵美, 荒木治子, 井尻珠美, 竹島多賀夫, 中島健二	頭痛患者におけるプロスタサイクリン合成酵素遺伝子多型の検討	日本頭痛学会誌	31	36-37	2004
古和久典, 竹島多賀夫, 中島健二	フローチャートでみる生活習慣病診療指針- 片頭痛と緊張型頭痛	成人病と生活習慣病	34	386-389	2004
古和久典, 竹島多賀夫, 中島健二	臨床医のための新薬の知識2004- 片頭痛治療薬 5-HT1B/1D受容体動作薬 安息香酸リザトリプタン	臨床と薬物治療	23	335-336	2004
古和久典, 竹島多賀夫, 中島健二	内科外来診療実践ガイド-頭痛	Medical Practice	21	311-320	2004
坂井文彦, 福内靖男, 岩田誠, 濱田潤一, 五十嵐久佳, 清水俊彦, 遠山和朗, 影山聡, 荒川一郎, 井尻章悟, 植地泰之, 永田傳	日本語版片頭痛用Headache Impact Test(HIT-6)の信頼性の検討	臨床医薬	20(10)	1045-1054	2004
坂井文彦, 福内靖男, 岩田誠, 西村周三, 濱田潤一, 鈴木則宏, 五十嵐久佳, 清水俊彦, 橋本しおり, 望月温子	日本語版片頭痛用quality of life調査書の信頼性と妥当性の検討	神経治療	21	449-458	2004
坂井文彦, 岩田誠, 福内靖男, 陶山和明, 元山英勝, 井尻章悟, 植地泰之, 永田傳	片頭痛患者におけるイミグラン錠(コハク酸スマトリプタン)の健康関連QOL改善の検討(市販後臨床試験)	臨床医薬	21	97-117	2005
坂井文彦, Cady R, Purdy RA, 福内靖男, 岩田誠, 五十嵐久佳, 竹島多賀夫, 中島健二	プライマリアケアにおける片頭痛の見分け方(座談会)	Parma Media	22	75-85	2004
柴田興一, 山根清美, 岩田誠	片頭痛の視覚誘発電位の空間周波数とコントラストの変化による特徴	日本頭痛学会誌	31	29-31	2004
清水俊彦, 岩田誠, 橋本しをり, 望月温子, 坂井文彦, 福内靖男, 西村周三, 鈴木則宏, 五十嵐久佳, 濱田潤一	片頭痛患者に対する医療経済額調的調査(中間報告)	日本頭痛学会誌	31(2)	81-83	2004
清水俊彦	女性の痛み 外来患者を中心に 外来で診る女性特有の痛みと薬物療法 「頭が痛い」と訴える患者	薬局	55	1961-1970	2004

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
清水俊彦	新しい診断と治療のABC21 神経2 頭痛 薬物乱用頭痛 予防対策と治療	最新医学	別冊	182-192	2004
清水俊彦	頭痛診療最前線 よりよき頭痛診療を目指して 頭痛の医療経済	カレントセラピー	22	1052-1053	2004
清水俊彦	臨床医のための新薬の知識2004 片頭痛治療薬の変遷と今後の動向 トリプタン製剤を中心に	臨床と薬物治療	23	326-330	2004
高瀬靖	プライマリケア医のための頭痛診療 薬物性頭痛	治療	86	1503-1508	2004
高瀬靖	難治性頭痛の病態, 予防, 治療. 薬剤誘発性頭痛および慢性連日性頭痛	臨床神経学	44	815-817	2004
高瀬靖	慢性連日性頭痛, 薬剤誘発性頭痛	メデイカル朝日	9	74-75	2004
高瀬靖	慢性連日性頭痛の現状と治療	カレントセラピー	22	1023-1026	2004
高瀬靖, 中野美佐, 巽千賀夫, 松山辰男	トリプタン系薬剤の乱用がみられた5例の検討	日本頭痛学会誌	31	117-119	2004
竹川英宏, 平田幸一	一般診療のための抗不安薬の選び方と使い方. 各診療科での抗不安薬治療の実際 脳・神経系	Modern Physician	24(6)	1051-1053	2004
竹島多賀夫, 荒木治子, 中島健二	慢性頭痛の予後決定因子	成人病と生活習慣病	34	892-896	2004
竹島多賀夫, 福原葉子, 井尻珠美, 中島健二	神経疾患の医療手順・神経疾患の医療手順・片頭痛	神経治療学	21	139-153	2004
竹島多賀夫, 荒木治子, 井尻珠美, 福原葉子, 中島健二	頭痛医療のためのクリニカル・クエスチョン	カレントセラピー	22	17-21	2004

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
竹島多賀夫, 中島健二	片頭痛の分子生物学	カレントセラピー	22	85-86	2004
竹島多賀夫, 荒木治子, 楠見公義, 福原葉子, 古和久典, 足立芳樹, 中島健二	頭痛をめぐる最近の話題: 2片頭痛の分子生物学と遺伝子研究	脳神経	56	645-654	2004
辰元宗人, 石原哲也, 結城伸泰, 平田幸一	寒冷曝露にて頭痛を繰り返した, 強皮症に伴う脳血管炎	日本頭痛学会誌	31(2)	166-168	2004
中島健二, 竹島多賀夫, 古和久典	トリプタン系薬物の比較とその分析 メタアナリシス	日本頭痛学会雑誌	31(2)	22-24	2004
永田栄一郎	頭痛薬	成人病と生活習慣病		187-191	2005
永田栄一郎	片頭痛の病態と治療方針	カレントセラピー		33-39	2004
根来清	頸椎性神経根症によって起こる頸部痛頁	脊椎脊髓ジャーナル	17	774-777	2004
根来清	難治性頭痛への対応, プライマリケア医のための頭痛診療	治療	86	1579-1584	2004
橋本洋一郎, 井重博, 田島和周, 内野 誠	プライマリ・ケアの頭痛診療と病診連携	カレントセラピー	22	1031-1037	2004
橋本洋一郎, 井重博, 内野 誠	慢性頭痛の治療と病診連携	治療	86	1608-1616	2004
濱田潤一	頭痛	Medicina	41(4)	592-596	2004
濱田潤一	妊娠中(時)における片頭痛	神経内科	61(1)	34-39	2004

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
濱田潤一	脳血管障害と頭痛	治療	86(4)	1541-1547	2004
濱田潤一	片頭痛	Molecular Medicine	41(6)	729-735	2004
濱田潤一, 清水利彦, 福内靖男, 坂井文彦, 岩田誠, 西村周三	日本語版片頭痛用quality of life調査書の言語的妥当性の検討	神経治療	21	443-447	2004
平田幸一, 伊澤直樹, 江幡敦子	Cervicogenic headacheの概念とメカニズム	脊椎脊髄ジャーナル	17(8)	778-783	2004
平田幸一, 星山栄成, 鈴木柴布, 小林映仁, 辰元宗人, 穂積昭則	緊張型頭痛の診断と治療	カレントテラピー	22(10)	1014-1017	2004
福原葉子, 竹島多賀夫, 植田圭吾, 名田正子, 佐々木清博, 井尻珠美, 中島健二	病院勤務の看護師, 薬剤師における頭痛関連QOLの検討.	日本頭痛学会誌	31	84-86	2004
房安恵美, 古和久典, 荒木治子, 井尻珠美, 竹島多賀夫, 中島健二	片頭痛患者における血漿substance P及びVACE活性の検討	日本頭痛学会誌	31	41-43	2004
間中信也	トリプタンの使用経験	脳と神経	56(9)	739-745	2004
間中信也	頭痛の概念・定義 新国際頭痛分類(ICHD-II)・一次性頭痛、二次性頭痛	最新医学・別冊 新しい診断と治療のABC21	別冊	9-15	2004
間中信也	頭痛の治療薬ー治療アルゴリズムを考慮した頭痛治療ー	治療	86(4)	135-140	2004
間中信也	頭痛・問診、診察のポイント	治療	3月増刊号	653-655	2004
間中信也	突如の頭痛	治療	3月増刊号	1023-1025	2004

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
間中信也	難治性頭痛の病態, 予防, 治療 群発頭痛とその近縁疾患: 診断と治療	臨床神経	44(11)	812-814	2004
間中信也	新国際頭痛分類(ICHD-II)	Annual Review 神経 2005		71-78	2005

厚生労働科学研究費補助金
こころの健康科学研究事業
慢性頭痛の診療ガイドライン作成に関する研究

平成 16 年度 総括・分担研究報告書
研究成果の刊行に関する一覧表

主任研究者 坂井 文彦

平成 17(2005)年 3 月

平成 16 年度 総括・分担研究報告書
研究成果の刊行に関する一覧表